

ヨハネによる福音書の6章ははじめの所において、パンの奇跡のとき、「**男たち**」だけで「**およそ五千人**」、女、子どもを入れると2万人ほどの人々が主イエスの周りにいたことの報告している(10節)。その人数がいつのまにか「**ユダヤ人**」という言葉になり、更に60節以下では「**弟子たち**」になっている。そして、最後にはたった「**12人**」だけが残る。2万人ほどから始まって最後は12人となっている。

そして、「**12人**」を代表する形で、弟子のペトロによる信仰告白がなされている。それは主イエスによって「**選ばれた**」、ごく少数の人間による告白である。しかし、「**選ばれた**」人間の中に、主イエスから離れていくだけではなく、裏切る人間、悪魔がいるという事実が主イエス御自身によって語られていることで6章は終わる。

前回の60節以降には、信じているはずの「**弟子たち**」が、「**つぶやき**」始めたユダヤ人同様に次第に「**つぶやき**」始め、やがて主イエスの許から離れ去ってしまうことが記されていた。「**ユダヤ人**」と「**弟子たち**」という区別はあるが、実際には両方同じ行動をとっていく。

今日の所においては、「**弟子たち**」の中でも特別な存在として、「**十二人**」が登場する。その12人を代表する形でペトロが信仰告白をするが、その「**十二人**」の「**中の一人は悪魔だ**」と言われてしまう。読者には、ここでユダの裏切りが予告されているけれど、言われた12人にとっては、それが誰であるかはずっと分からぬままである。そういう緊張をはらむ集団として、12弟子はその後も存在することになる。

こう見てみると、不信仰な「**群衆**」「**ユダヤ人**」と信仰深い「**弟子たち**」、あるいは途中で信仰を捨てた「**多くの弟子たち**」と最後まで信仰を持っていた「**十二人の弟子たち**」というような単純な分け方が出来ない。これが示しているのは、どんな人間も不信仰であり、あるいはそうなる可能性を秘めているということであり、それはまさに教会の現実そのものであるということであろう。

67節. 「**そこで、イエスは十二人に、『あなたがたも離れて行きたいか』と言われた。**」

「**十二人の弟子たち**」のことは、ヨハネによる福音書ではここが初めて。他の福音書では、十二弟子の名前があげられていて、弟子としての任命の記事があるが、ヨハネによる福音書にはない。ここで分かるのは、その十二人の中に「**ペトロ**」がいて、「**イスカリオテのユダ**」がいるということだけ。恐らく、ヨハネによる福音書では、この二人が十二弟子を代表していると言って良いかもしれない。

その「十二人」に向かって主イエスは「**あなたがたも離れて行きたいか**」と問いかける。この問いは、今日の私たちキリスト者に向けての問いとして受け止めるべきものである。何故なら、教会の礼拝に集まってこないキリスト者が沢山いるから。そして、私たちの誰かが、今後そういう人間の一人にならないとも限らないからである。だから主イエスは残った弟子たちに向かって、「あなたがたはよくぞ残ってくれた。あなたがたこそ、本当の弟子だ」とは言われず、「**あなたがたも離れて行きたいか**」と問うのである。

68 節. 「シモン・ペトロが答えた。『**主よ、わたしたちはだれのところへ行きますようか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。』**」

この場面は、他の福音書におけるペトロのキリスト告白の場面と比べられる(マルコ 8:27 以下、マタイ 16:13 以下、ルカ 9:18 以下)。他の3つの福音書では、人々は主イエスのことをエレミヤの再来だとか、バプテスマのヨハネの生まれ変わりだと言っている。そういう状況の中で主イエスは弟子たちに尋ねた。「**あなたがたはわたしを何者だと言うのか。**」

ヨハネ福音書においては、その問いが「**あなたがたも離れて行きたいか**」となっている。それは、「私以外に、あなたがたが従うべき存在はいるのか?」という問いである。その問いに対して、ペトロは、「**主よ、わたしたちはだれのところへ行きますようか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています**」という信仰告白で応答する。

ギリシャ語では弟子たちが「**離れ去る**」という言葉(ἀπέρχομαι、アペルコマイ)と同じ言葉がここでも使われていて、「私たちは決してあなたから離れ去りはしません」という愛を告白している。主イエスこそが「**永遠の命の言葉**」(ῥήματα ζωῆς αἰωνίου、**レーマタ ゴーエース アイオーニウー**)を持っているのであり、その命の言葉から離れ去ってしまえば、自分たちに待っているのは死の滅びだけだからである。

ここには、二度も「**わたしたち**」という一人称複数形が出てくることから分かるように、この告白はペトロ個人の告白であると同時に、「**十二弟子**」全員の告白であり、さらにこの福音書が書かれた時代の教会の信仰告白であるに違いない。

その時代、キリスト教会はユダヤ教から追放され、迫害を受ける集団であった。そして、ユダヤ教からの追放はローマ帝国の中で迫害を受ける危険性を含むものであり、その危険性は次第に現実となっていく。主イエスが肉体をもって地上を生きておられた時も、最初は多くの支持者や支援者、信奉者がいたはずだが、そういう人々は主イエスが自分たちが願っているような人間ではないと分かってくるについて離れ去って行った。

それと同じようなことが、この福音書が書かれた1世紀末のキリスト教会にも起こっている。その現実を、この福音書は描いているのだし、それはまたいつの時代の教会においても起こる現実であることに変わりはない。

70-71 節. 「すると、イエスは言われた。『あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。』 イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。」

ヨハネによる福音書は、読者にだけ、この悪魔は「ユダ」であることを知らせている。

「**イスカリオテのユダ**」については、既に 64 節に、「**イエスは最初から信じない者たちが誰であるか、また、ご自分を裏切る者が誰であるかを知っておられたのである**」とある。こういう言葉から、いくつもの疑問が生じてくる。例えを列挙すると、

1. 最初から裏切る者だと分かっている主イエスはユダを選んだのか？
2. もしそうであるならば、ユダは神様の御心を行うための悲劇的な道具なのか？ そうであるなら、ユダは裏切り者ではなく、神の忠実な僕ということにはならないか？
3. ユダは最初から裏切る気があったのか？ 途中から、サタンが入って彼はそのように仕向けられたのか？ すると、悪いのはユダではなくて、サタン、悪魔なのか？
4. そもそも「裏切る」とはどういうことなのか？ 多くの群衆と同じように、ユダの方がむしろ主イエスに裏切られたと思ったのではないか？
5. 少し視点を変えて、主イエスの十字架はユダにとっても贖いになるのか？
6. ユダは自殺したとされているが、それは永遠の滅びを意味するのか？ イエスは、陰府にまで降り、そこで獄に捕らわれている霊どもに説教をされたとある（ペトロの手紙一 3:19—20）が、その陰府にユダはいたのか？ などなど。

答えは謎のまま。一つ言えるのは、ユダに限らず、12 人は主イエスが「**選んだ**」弟子であることを、主イエスご自身が明言しておられること。その「**選んだ**」弟子の一人は「**悪魔**」だと言われる。

マルコやマタイ福音書では、キリスト告白をした「**ペトロ**」その人が「**サタン**」（「**悪魔**」と基本的に同じ意味と考えてよい）と呼ばれる（マルコ 8:33、マタイ 16:23）。「**悪魔**」にしる、「**サタン**」にしる、それは恐るべき形相をした怪物ではなく、人間であり、その人間の自覚としては、主イエスを信じており、愛してもいる人間である。彼ら自身は、少なくとも自覚として、主イエスを裏切るつもりなど少しもないし、たとえ迫害されても主イエスを見捨てて逃げるつもりなどないから。

主イエスが弟子たちを「**選ぶ**」という言葉は、13 章と 15 章に出てくるが、15 章 18 節以下には、主イエスによる「**選ぶ**」と世からの「**迫害**」は切っても切れない関係にあることが明言されている。主イエスは、私たちキリスト者を世から選び分かたれて、神に属する者とされたからである。しかし、世の闇は神の光を嫌う。だから、主イエスを迫害し殺すのである。それと同じように、主イエスに選ばれて神に属する者となったキリスト者を迫害する。

そういう迫害あるいは困難の中で、信仰を生きることは容易なことではない。だから 6 章の段階で、正しい信仰告白をしたペトロは、ここで悪魔とは呼ばれていないが、主イエ

スが捕えられる時には、「あなたのことを知らないなどとは決して言いません」と言っていたのに、「あの人のことは知らない」と言って逃げてしまったのである。

今日の箇所では「裏切る」と訳された言葉は、**パラディドーミ** (παραδίδομι) という言葉である。ヨハネ福音書においてユダに関して使われる時は必ず「裏切る」と訳される。でも、この言葉は元来、善悪とは関係のない一つの動作として「引き渡す」という意味を持った言葉である。そして、この言葉は、ヨハネ福音書の終盤に何度も出てくる。主イエスをローマの極刑である十字架刑で殺したいユダヤ人が、主イエスをローマの総督ピラトに「引き渡す」。そういう場面で繰り返し使われる言葉が、この「**パラディドーミ**」である。そして、ピラトは、主イエスを十字架につける理由を見出せなかったが、ユダヤ人の圧力に負け、「**そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した**」とある。これが、ヨハネ福音書において、人間が主語として「**パラディドーミ**」が使われる最後である。

その先、主イエスの十字架の死の場面にこう記されている。

「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『**渴く**』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、『**成し遂げられた**』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」

最後の「**息を引き取られた**」の「**引き取られた**」が、ヨハネ福音書において最後に出てくる「**パラディドーミ**」である。そして、主イエスが主語としてこの言葉が使われるのはここだけ。ユダの裏切り（引き渡し）、ユダヤ人の引き渡し、ピラトの引き渡しという行為の連なりの中で、神の子が人間に殺されるという最悪の罪が犯されていくのに、実はそのすべてに神様の御心の実現があり、主イエスは、すべての人間のすべての罪を背負って十字架に磔にされて、最後はご自身の息を、その霊を、神様に「**引き渡される**」（**パラディドーミ**）のである。これが、肉体をもって生きておられた主イエスの最後の行為である。